

# ネルヴァルの夢と人生、そして神話

## LE RÊVE ET LA VIE DE NERVAL, ET LE MYTHE

博士前期課程 仏文学専攻54入学

恩 蔵 昇

NOBORU ONZO

### I

ネルヴァルの「オーレリアあるいは夢と人生」*Aurélia ou le Rêve et la Vie* は1855年、『パリ評論』*Revue de Paris* に発表された。第一部は1月1日、第二部が2月15日であるが、ネルヴァルがヴィエイユ・ランテルヌ街で縊死体となって発見されたのは、同年1月26日のことであった。従って「オーレリア」は、ネルヴァルの生と死の境をはさんで発表されたということになる。彼の生前と死後に発表されたこの「オーレリア」の冒頭の部分をまず引用しよう。

〈夢は第二の人生である。私は、われわれを不可視の世界からへだてている象牙あるいは角でできたいくつかの扉を、戦慄を覚えることなしには突きやぶれなかった。睡眠の最初の数瞬間は、死の似姿である。(……)かくして、「精霊」の世界がわれわれに対して開かれるのだ。〉<sup>1)</sup>

ネルヴァルの「夢」は人生（いわば第一の人生）に対する第二の人生であり、不可視の世界を、すなわち「人間」の世界に対する「精霊」の世界を開くものである。この二つの対立物一夢と人生一の両方がネルヴァルにとっての生であり、この生の二重性はネルヴァル的世界における様々な二対立をもたらすだろう。それはまた内的世界と外的世界であり、人間の内部における二重性である。

〈ひとつの怖ろしい観念が浮んだ。「人間は二重なのだ」(……)あらゆる人間の内には 観客 と 俳優、語る者と答える者がいるのだ。近東人たちはそこに二人の敵対者を見た。すなわち、善霊と悪霊とである。〉<sup>2)</sup>

世界が二つに引き裂かれているという観念は、後に世界の統一性への渴望を導き出すことになるが、その統一性とは「万物照応」の観念によって明らかにされるものだ。そのピタゴラス的思想は『シメール』に収録された「黄金詩篇」*Vers dorés* にあらわれているが、「オーレリア」第二部六章で、一種の自然との融即状態 (*état de la participation*) が述べられる。

〈私は自分に言った、どうして私はこんなに長い間、自然の外に、自然と一体化することなく存在することができたのだろうか。すべては生きており、すべては動き、すべては照応している (……… )。〉<sup>3)</sup>

しかし、この二つの世界の照応関係は、われわれの理性が曇らされているために、それとはっきり

感知することができないのである。

〈私は次のことを理解したように思った。すなわち外的世界と内的世界の間にはひとつの絆<sup>きづな</sup>が存在するのだ。不注意あるいは精神の混乱によって、その明らかな諸関係が歪められているにすぎない(……)〉<sup>4)</sup>

彼のいわゆる「地獄下り」 *une descente aux enfers* は、この調和への、夢の王国を開く鍵を求めてなされる試煉の旅であると言えるだろう。「オーレリア」冒頭で語られる「夢」はその〈おぼろげな地下道〉<sup>5)</sup>と「精霊」の世界を含んだ表現であり、これを広義の「夢」とするならば、「精霊」の世界への道を開く鍵は狭義の「夢」である。

〈夢は人間に対して精霊の世界との霊的交通を開くものである、という私の抱いていた観念によって、私は希望をもちつづけていた(……)〉<sup>6)</sup>

夢を媒介にして不可視の世界を探るという考えは、精神分析における夢判断の概念と重なるものである。その場合、不可視の世界とは無意識の謂であり、夢判断によってその心的内容を意識化しようとすることは一つの自己理解である。そして、ネルヴァルの夢の世界への参入も、彼自身の内部の闇の中へ深く降りてゆくことにほかならない。この一致はおそらく偶然ではない。というのも、ネルヴァルの思想も精神分析学もその思想の底流に神秘主義があるからである<sup>7)</sup>。さて、この狭義の夢は精霊世界への入口である。それは夢見る主体の属する現実世界の反映であるだろう。しかしまた一方で、この〈おぼろげな地下道〉である夢は、精霊世界から見れば現実世界への通路でもある。ということは、この夢を見る主体は精霊であると言えなくもない。いずれにしても、この夢は精霊世界の反映をも含んでおり、従って真実の断片を含んでいるのである。この不可視の世界をはっきりと見ることはイシスのヴェールをはぐことと同様であり、宇宙の真の統一性を再発見することであるからだ。この真実の断片を含んだ夢は、「シルヴィ、ヴァロワの思い出」 *Sylvie, souvenirs du Valois* で描かれている。それは半覚醒状態で見た夢、あるいは思い出であり、あのアドリエヌ *Adrienne* の夢である。これによって一つの真実が、「私」に明らかにされる。

〈数年来忘れていた一つの似かよった面影が、今や、不思議な明瞭さとともに、くっきりと現われた。あたかも美術館で巨匠たちの古い下書きを見たのち、別のところでそのまばゆい<sup>オリジナル</sup>完成作品を見出すように、油絵を作り上げていたのは、時間によってぼかされた一枚の鉛筆画だったのだ。

女優の姿の下に修道女を愛しているのだ。そして、もしそれが同じ女だったとしたら… そこには人を気違いにするものがある。〉<sup>8)</sup>

「油絵」となっている女優オーレリー *Aurélié* は、舞台照明の下、〈その甘美でありながら、はっきりと透<sup>とお</sup>る声の震え〉(「Ⅰ、——失なわれた夜」)<sup>9)</sup>で、主人公である「私」を魅了し、「鉛筆画」にたとえられた修道女アドリエヌは〈射し初めた月光〉を浴びて、〈生き生きとして心にしみいるような、そしてこの霧深い地方の娘らしい幾分曇った声で〉(「Ⅱ、——アドリエヌ」)<sup>10)</sup>古い恋歌<sup>ロマン</sup>を歌うのである。この類似 *ressemblance*、また同一性の発見は、夢の論理にもとづくものであり、また神秘思想に見られる類似 *analogie* の考え方である<sup>11)</sup>。それは「多」の中に「一」を見ようとする心

的態度であり、一種の象徴的思惟である。女優が舞台の上で様々な人間となりうるように、人生という舞台の上に不可視世界の存在が様々な人間の姿をまとして現われるのだ。(イシスは自分の愛する女の顔立ちをとって現われる。)〈おそらくある精霊が彼のうちに語っているのだ〉<sup>12)</sup>とか、〈彼女の霊がこの女の中にいるのかも知れない〉<sup>13)</sup>といった表現を見ても、芝居が(別の現実を作りうるにしても、そのことによってより一層)人生の投影であるように、人生は夢の世界(精霊の世界)の投影であるとネルヴァルは考えているように思われる。

しかしまた、死によって失なわれた女の顔立ちを別の女の中に見い出すということは、ネルヴァルの運命的なテーマであった。彼は自分を産んでから2年後にドイツで死んだ母、従って見たこともない母の顔をブルードンあるいはフラゴナールの描く「慎しみ」*la Modestie*の中に見ようとした。

〈私は一度も母を見たことがない(……)。私はただブルードンあるいはフラゴナールの「慎しみ」と呼ばれる当時のエッチング画に母が似ていたということを知っているだけだ。〉<sup>14)</sup>

そして〈再び会うことも忘れることもならず、その渴望の念が決して癒えることのなかった、月の魔術における〉<sup>15)</sup>アドリエンヌもまた死んだ女である<sup>16)</sup>。オーレリーの中にアドリエンヌの面影を見い出すことは、肖像画の中に母の面影を見い出すことである。死んだ女に対する愛情は、その愛の渇きが決して癒されることなく、従ってますます強くなってゆく。というのも「エロチスムとは、死を賭するほどまでの生の讃歌である」<sup>17)</sup>という言葉にもあらわされるように、愛は死を超えようとする原理だからだ。愛は死によって、あるいは不在(空間的・時間的隔たり)によって一層強く意識され、高められてゆく。ネルヴァルは次のように書いている。

〈けだものたちは近くから愛し合い、精霊たちは遠くから愛し合う。〉<sup>18)</sup>

ネルヴァルはこのような愛の本質をいたるところで見い出すだろう。純粋な愛には(心ならずも)遠く離れて愛するための隔たりが必要なのだ。

〈近くで見ると、現実の女性はわれわれの純心さを傷つけるのだった。女性は女王か女神に見えなくてではならなかった、そしてとりわけ近づいてはいけなかったのだ。〉<sup>19)</sup>

世俗的な愛は、それを手に入れても愛の成就ではなく、一時の浮気にすぎない。現世(現実世界)での愛はつねにネルヴァルを裏切り、失望させるだろう。真の愛とは一定の隔たりを持つことによって存続し、宇宙的調和の中においてはじめて成就されるものであるだろう。空間的な隔たりと同時に時間的な隔たりもネルヴァルの愛においては必要なものである。次には祖母に対する情愛を例に引こう。ここでは祖母への深い愛がゆっくりとした時間の隔たりを増すにつれて、つまり死とその結果の不在がより強く意識されるにつれて、形作られてゆく。

〈私の祖母が死んだのは三年前、

——なつかしいおばあさん、——そして埋葬の時には、

親族も、友達も、みんなが泣いていた

苦く深い悲嘆にくれて。

私だけは家の中をさまよっていた。悲しむよりも  
びっくりして。そして私とその棺に  
歩みよると、——誰かが私をとがめた  
涙もながさず叫びもせずに見ているなどと

騒々しい悲嘆は、すぐに過ぎ去った  
三年このかた、別の感情が  
幸福、不幸が——革命が——  
人々の心から祖母の記憶を消し去った

私だけは祖母を思い、そしてしばしば涙ぐむ  
三年このかた、時は力を得て、  
木の幹に彫られた名前のように  
祖母の思い出はより前に穿たれてゆく！><sup>20)</sup>

これは回想によって〈より前に穿たれてゆく〉愛である。ネルヴァルの愛は隔たりによってより精神的＝精霊的になってゆくのである。「オーレリア」第一部七章では、オーレリアが「死んだ女」の系列に加わることに一種の満足、苦悩の裏返しであるような満足を述べている。

〈それに、彼女は生きていた時よりも、死んでから後により一層私のものとなったのであった。><sup>21)</sup>

不在によって強められた愛、回想された愛は、自分に、自分の人生に、また宇宙に、重要なものが欠けていることを意識させる。この失なわれた愛、この失なわれた時を求めて、彼は「地獄」の試煉へとつき進んでゆくのだ。それは同時に宇宙の失なわれた時を求める試みであり、始原の高みにある宇宙を奪いかえそうとする認識の旅である。なぜなら、宇宙開闢神話とは想像力による宇宙認識にはかならないからだ。

## II

「シルヴィ」の前半に描かれている美しいヴァロワ地方は、ベッドの中や馬車の中で再構成された「私」の夢あるいは回想である。それは地上の楽園、彼の人生から失なわれたユートピアとしての幼年時の思い出なのだ。しかし、「私」が今のヴァロワに着くやいなや幼年時のユートピアは廃墟にすぎなくなってゆく。典雅な建築物をちりばめた土地ヴァロワのいわば象徴的存在であったシルヴィ——彼女も土地も異教的な色彩が濃い——にはすでにグラン＝フリゼという婚約者がおり、現実的な道を歩んでいる。

〈すべてはなんとさびしく、陰鬱なのだろう！ シルヴィの魅力的なまなざしや、はしゃいで駆け回る姿、楽しいな叫び声が、かつては今私が歩き回ってきた場所に何という魅力を与えていたこと

か！)><sup>22)</sup>

火の詩人ネルヴァル（「私」）が愛した森の娘、火の娘の一人、妖精的なシルヴィはもはやレースを織らず、手袋を作る女になっている。もはや祖母たちから伝えられた古い唄は歌わずに、オペラの Aria を歌う。しかも〈楽節を区切って〉<sup>23)</sup>。かつてのシルヴィ＝ヴァロワは失なわれてしまい、それはただ回想によってのみ復原（再構成）されるのである。だが、回想とは精神を集中して記憶の糸をたどろうとつとめるものではない。言うまでもなく、それは何かの機会に浮び上がってくるものだ。

（新聞の二行記事、匂い、味覚等々）。「散策と回想」 *Promenades et Souvenirs* という題が示すように、回想は散策にたとえられるだろう。散策と回想とは再び自分のもといた場所に戻るために出発するのである。（放浪についても同様であるだろう。放浪の旅も世界のどこかにあるおのが故郷へとさすらうのだ。）散策が戻ってくることを前提として出発するように、回想は再び心に思い描くために忘却すると言いたいほどだ。シルヴィは回想されるために忘れられていたかのようである。

〈あんなにも愛していたシルヴィを、私はなぜ三年このかた忘れていたのだろうか？〉<sup>24)</sup>

この忘却の月日、時間的な隔たりは、シルヴィを、失なわれた日々を、幼年時のヴァロワを再び取り戻そうとする強い欲求を惹き起す。しかし、失なわれたユートピアはもはや戻ってくることはない。

このユートピアのもう一つの星、アドリエヌヌには、「私」はただ一度しか会っていない。だがそのことによってアドリエヌヌをめぐる回想は重層的になってゆき、回想の回想、あるいは夢の夢といったものになってゆく。この〈時間によってばかされた〉修道女は、「私」の心の中で区別を乗り越えたアニメの女性心像となり、夢の中に定着するのである。〈霧深い地方〉の〈幾分曇った声〉 *une voix légèrement voilée* で歌うこの娘は、無意識の霧の中で、「ヴェールにつつまれて」 *voilée* いるのだ<sup>10)</sup>。

修道女と女優の同一性が、夢によって「私」に啓かれた時、「私」はそこに狂気の匂いをかぎとる。しかし真実を語る者、不可視の世界を見透す幻視者は常に外観としての狂気を帯びているだろう。1830年代に、したがって1841年の最初の狂気の発作以前に書かれたと推定される「阿呆大王」 *Le Prince des Sots*<sup>25)</sup> で王の道化役である阿呆大王、ゴナン親方はこう言っている。

〈かつてフランスの国王はみな、自分の道化を持っていたものです。その役割というものは、金だけが目当ての宮廷の嘘や幻影にかくされた真実をあばくことにあったのです。〉<sup>26)</sup>

道化 *fou* とは狂人 *fou* のことである。一方で王の気晴らしの役目を持つ道化は、他方で狂人として、すなわち外観上持っている狂気の下に、王に対して宮廷の真実の姿を明らかにする役割を持っているのだ。それは権力抗争の舞台である宮廷においては危険なことであるが、だからこそ外観としての狂気を身にまとっているのである。狂気と真実とはここに結びつく。もっと後の時代には、阿呆大王たる真実の語り手は狂人として精神病院という名の監獄にとじこめられるだろう<sup>27)</sup>。こうした真実の語り手＝狂人の運命をネルヴァルはのちに自分の運命としてゆくのである。実際、彼は自分の狂気を病気だとは思っていない。

〈私も彼等（訳注、スウェーデンボルグ、アブレイウス、ダンテ）の例にならって、わが精神の神秘のうちに起った長い病気の印象を書きうつしてみようと思う。だが、何故自分でこの病気という言葉を使うのか、私にはわからない。というのも、私自身について言えば、かつてないほどの健康を感じたからだ。（……）すべてを知り、すべてを理解するように思えた。夢想は私に至上の歓喜をもたらした。人々が理性と呼ぶものを取り戻すことで、その至上の歓喜を失なったことを悔まなければならないのだろうか？……〉<sup>289</sup>

不可視世界を見ることのできない人々にとって、詩人が獲得した真実は未知のものであり、既知によっては説明できぬものであるために、病気（狂気）という言葉は詩人に無理矢理押しつけるのである。しかしこの真実は、ネルヴァルが地獄下りと呼ぶように「あらゆる超人的な力を必要とする言うに言われぬ苦悩」<sup>290</sup>の中で、獲得した「未知のもの l'inconnu」<sup>291</sup>なのである。そして、未知のものに至ることが詩人の運命を生きたことなのである。なぜなら、真の詩人にとって問題は既知をいかにうまく解説するかにあるのではなく、未知の中に身をゆだねて、いかに語るかにあるからである。この未知に至る道は自己自身の探求である。

〈われわれは、われわれの精神の深底を知らないものである。——内部へと神秘的な道は通じている。〉<sup>300</sup>

「神秘的な道」には一つの門がある。おそらく「われを入るものは一切の希望を捨てよ」<sup>311</sup>と書かれた門を戦慄を覚えながらくぐってゆくネルヴァルは、いわば無意識の水の中に潜ってゆくのである。それは死と再生の水である。その中に没することは死を、そこから浮上することは新生を意味する<sup>320</sup>。この混沌の水から上る時、夢と人生は融合し、神話を語る原初的人間が現われるだろう。

### III

ネルヴァルの回想は彼個人の記憶にとどまらない。「オーレリア」第一部七章で〈研究の記憶と夢の断片のいりまじった一種の世界史〉が語られるが、それはいわば人類の記憶を宇宙の始原の時にまでさかのぼるだろう。

〈近代に伝わる天地創造の伝説にとどまらず、私の思念はその彼方にまでさかのぼった。私はいわば回想のうちに、護符を用いて守護神たちが結んだ原初の契約をかいま見た。私は「聖卓」の宝石をひとつに集め、その周囲に、たがいに世界を共有していた原初の七人の「エロイム」を描き出そうと試みたのだ。〉<sup>340</sup>

ここに述べられる「聖卓」*Table sacrée* は「ソロモンの宝石に縁どられたエメラルド板」<sup>350</sup>である。宝石とはカステクスによれば<sup>360</sup>、ダイヤモンド、ルビー、エメラルド、サファイヤ、トパーズ、アメジスト、ガーネットの七つであり、それは古代に知られていた惑星の数と、エロイムの人数に符合している。それは調和ある始原の宇宙を描き出そうとする試みにはかならない。セリグマンによれば、このエメラルド板は〈ヘルメスの埋葬死体のあるうす暗い坑<sup>おな</sup>のなかの、そのミイラの手<sup>て</sup>のなか〉<sup>370</sup>にあったと言われているが、その文書には次のように書かれていると言う。

〈そして万物は、一つのものの和解によって、一つのものから成ったように、万物は順応によって、この一つのものから生まれた。〉<sup>389</sup>

万物が一つのものから生まれ、「一」から「多」へと分化してきたという考え方は、ヘルメルの術の思想であり、またおそらくC. G. ユングにも見られるものである。この分化は区別することから生ずる。というのも人間は〈区別することを本質とするもの〉<sup>390</sup>であるからだ。ところでデカルト以来の分析の方法も、区別＝分割を思考の方式としたものである<sup>40</sup>。すなわち、分析とは、本来不可分な全体的統一をもつものを、視点を無制限にふやすことによって分割し、比較対照して、その函数関係においてその対象を説明しようとするものである。それは方向づけによってなされる理解である。この分析に立脚する宇宙理解は、確かにひとつの宇宙認識をみちびく。だがこのような合理論的認識は、視点をふやしつづけることによって、宇宙をますます細分化し、その全体性の把握はますます困難になってゆく。この視点とは科学がその概念を構成してゆくときに立脚点とするあの仮定のことであり、科学的認識はその仮定に制限されるのである。従ってその視点が包みこむことのできない未知が現出した場合、新たな視点＝仮定を提出せざるをえず、科学は細分化＝専門化を押し進めてゆくだろう。

さて一方ネルヴァルの思惟は区別することによって認識をすすめようとするものではない。

〈必要とあらば無意味と不条理の境界を越えなければならない。私にとって理性とは、私の理想を征服し、固定させるものであった。〉<sup>41</sup>

〈無意味と不条理の境界を越える〉とは、半覚醒の夢の中で明らかにされたアドリエンヌとオーレリーの同一性を認めることであり、両者を区別する境界を越えることである。つまりアドリエンヌに対する恋とオーレリーへの恋が同一のものであると認めることなのだ。それは彼によって夢見られた真実である。ネルヴァルの境界侵犯はこの〈理想〉の恋だけにかぎらない。彼が〈唯一の恋〉と呼ぶものは〈現実〉の恋、シルヴィへの恋も含むものである。

〈エルムノンヴィルよ！（……）おまえは唯一の星を失ってしまったのだ、二重の輝きで私に対して様々に光を変えた星を。アルデバランの変光星のようにかわるがわる青にまた薔薇色に光を変えたその星は、アドリエンヌだったか、シルヴィだったか。——それは唯一の恋の両半分だった。一方は崇高な理想、他方はなつかしい現実だった。〉<sup>42</sup>

「私」はこの〈唯一の恋〉を成就しようと決心し、いわば〈理想を征服〉しようとして愛情あふれる手紙をオーレリーに送るのだが彼はその手紙に「未知の者」l'inconnu と署名をする。この「未知の者」、ヴェールをかぶった人間であるネルヴァルは、実際に彼の生きた時代の中でも仮面（ヴェール）をかぶろうとする。

〈その時分、彼はジェラルド・ド・ネルヴァルとは名乗らず、ラブリュニー Labrunie と呼ばれてゐた。ジェラルドといふのは彼の洗禮名だった。スタンダールのやうに、彼も様々な匿名を使つて自分を隠すことを好んでゐた。彼は仮面を見抜かれると、それをかなぐり棄てて、別な仮面、別な覆面をしたものであつた。〉<sup>43</sup>

一方、このような匿名性を〈好んでゐたジェラルドの生きた時代は、文学の大衆化が起きた時代

である。レーモン・ジャンによれば、〈ある形での文学の普及を熱心に望む大衆の存在〉<sup>44)</sup>によって〈作家たちが、ジャーナリズム——言葉のもっとも広い意味において——の中に、以前には存在しなかった販路を見い出す時代〉<sup>44)</sup>なのである。区別を超えるいわば非区別の思惟をもつネルヴァルは、この時代の人間総体である大衆の中に生きた人間であり、この総体としての大衆から来る無名性をわがものとするだろう。この匿名性、無名性は仮面の下に様々な人間となることを可能にする、ということは逆に様々な人間が自分になることをも可能にするのだ。そしてこれが同時代の人々との同一化を可能にする。これを空間的な横の軸とすると、時間的な縦の軸は個人と種族全体との一体化である。

〈われわれはわれわれの種族の中に生きており、そしてわれわれの種族はわれわれの中に生きているのだ。〉この観念は私にすぐ可感のものとなり、(……) その中に私がおり、またその全体が私自身である跡絶えることなく綿々と連なる男女を見るように思われるのだった。〉<sup>45)</sup>

ネルヴァルが1841年のレクレール宛書簡に〈みずからを賢者と信ずる狂者、かつもしXであるなら賢者となる狂者、ジェラルル〉<sup>46)</sup>と署名していることに注目して、J. = P. リシャルは次のように述べている。

〈事実、これ以後ネルヴァルは一個のXであり、未知なるもの、誰でもよいものであって同時に万人であるもの、となる。同一なるものは、無名者の狂気の中で仕上げられ、完成されるのである。〉<sup>47)</sup>

そして時間の軸についてつけ加えるならば、この無名者は宇宙の歴史と同じほどの永い「時」を持つのであり、また宇宙の時間の一つ一つの「時」にふれる〈跡絶えることなく綿々とつらなる男女〉をその総体として自らのうちに含むのである。

このような認識を可能にする思惟とはどういうものなのであろうか。それは区別する思惟ではなく、非区別の思惟である。方向づけられた思惟ではなく、方向づけられない思惟である。C. G. ユングは思惟を二つの形式に分け、一方を「方向づけられた思惟」とし、もう一方を夢あるいはファンタジーとした<sup>48)</sup>。前者は言語によって思惟し、ということは他者に向けて、外に向けて「方向づけられた思惟」もしくは論理的思惟であり、環境適応行為(「聖卓」の言葉、「万物は順応によって生まれた」を想起してほしい)のひとつである。後者は前者と両極をなし、〈言語形式による思惟がやみ、イメージはイメージへ、欲望は欲望へ、感情は感情へと更にかりたてられ、現実のあるがままにではなく、そうであればよいと願いたいような、現実を代償するような内容をつくりあげる〉<sup>49)</sup>思惟である。(フロイトは後者を「退行」と呼び、思惟とみなしていない。)そして夢の思惟は〈太古以来数百万年に亘って魂が無意識内に保存してきた精神(霊)の原像、そのようなもうひとつの客観的世界〉<sup>50)</sup>を認識しようとしている。こうした「もうひとつの客観的世界」を認識しようとする思惟こそ、ネルヴァルの思惟(あるいは「理性」と言いうるものではないだろうか。それは宇宙認識としての神話的思惟(宇宙開闢神話を生み出す思惟)である。すなわち区別(分割)によって「一」から「多」へと変化してきた万物、分裂を繰り返してきた万物を、新たな「一」の中に捉えなおすことであり、また非区別によって二対立(分割の基本型)を唯一のものへと融合させるものである。すなわち、ある区別を可能にする一つの視点からすれば、その区別によって生じる観念(概念)自体を、存在がそ



こから生じた無の中へと押しやることである。従ってここでは科学的認識は崩れ去り、見出すべきものは分裂した宇宙を融合させる「接ぎ目」なのだ。

〈あばら屋には火もなく、窓にはガラスもなく、私は天国と地獄の接ぎ目を見い出そうとしています。〉<sup>51)</sup>

天国と地獄とを同時に包み込み、またどちらでもあり、どちらでもないもの、そのような象徴的存在としてはアブラクサス ABRAXAS がいる。このグノーシス派の護符に描かれる神は、神の神であると同時に悪魔の悪魔であり、原初のヘルマフロディトスである<sup>52)</sup>。ネルヴァルはパンドラ Pandora の中にそのイメージを見るだろう。

〈おそらくは彼女に、——いや実際彼女に(……)「男でなく、女でなく、両性具有者でなく、娘でなく、若くなく、老いておらず、純潔でなく、狂っておらず、控え目でない、そしてこれらすべてをあわせたもの……」というボローニャの碑に刻まれたあの解読不可能な謎をあてはめることができたのだ。〉<sup>53)</sup>

こうした非区別的存在、すなわち対立概念をすべて内包する存在は、「区別することを本質とする」人間にとっては極度に危険なものであり、わざわざである。それは無——そこから万物が生まれ出るような無——なのであり、この原初の混沌の中に身をまかすことは、「区別するもの」としての人間の死を意味する。この錯乱の地獄を下ってゆくネルヴァルは、自分をわざわいの「パンドラの匣」を送られた者、すなわち天上世界の火を奪って人間世界にもたらしたプロメテウスと同一視するだろう。

〈プロメテウスの名前はいつも奇妙に、私を不快にするのだ。というのは、私はいまでも、アルシッドがそれから私を救ってくれたあの禿鷹の永遠の嘴をわき腹のところに感じているのだから。〉<sup>54)</sup>

ネルヴァルが「地獄」を下ってゆく時、彼はこの恐ろしい「無」の嘴を感じるだろう。「オーレリア」第一部六章ではアニマ的女性心像とも言うべき女性が、彼の目の前で庭と一体化してしまうのである。

〈次いで彼女は明るく輝く光線の下で大きくなりはじめ、その結果次第次第に庭は彼女の形になってゆき、花壇と樹々は彼女の衣服の薔薇の形をした模様と縁取りのスカラップになっていった。(……)「ああ、逃げないで下さい！」私は叫んだ……「自然があなたとともに消え去ってしまいますから！」(……) いくつもの声が言った、「宇宙は夜になった！」と。〉<sup>55)</sup>

ネルヴァルが「地獄下り」と呼ぶ彼の狂気とは、「区別することを本質とする」人間が、非区別という無の深淵を前にした状態であり、宇宙が破滅しようとする状態である。この破滅への精神の危機的状态 *état critique* は、同時に再生への臨界状態 *état critique* である。すなわちそれは、想像を絶するほどの温度と圧力の加わっている状態であって、気体が一瞬のうちに液体に変化しようとする、まさしくその状態である。ネルヴァルは、この変化の臨界点を次のように述べている。

〈金属が沸騰するところを見たまえ。段階を追って溶けてゆくのではない。ある一瞬は固体である。次の瞬間、一切が液体と化す。〉<sup>56)</sup>

死と再生の象徴である黒い太陽を見たのち、「オーレリア」第二部五章では、「私」のもとに女神が現われて、この変化（新生）の予告をする。

〈私はまさしくマリアであり、まさしくおまえの母であり、またまさしくあらゆる姿の下に、おまえが常に愛してきたその人です。おまえの試煉の一つ一つに応じて、私は自分の顔を覆っている仮面のひとつひとつを取り除いてきました。やがておまえは、ありのままの私を見ることになるでしょう。〉<sup>59)</sup>

女神はネルヴァルの試煉の段階に応じて、その仮面（ヴェール）を取ってゆく。このマリア＝オーレリアは第二部二章においてA \* \* \*となる。それはおそらく、ネルヴァルが非区別の原理によって無名性をおび、〈未知なるもの、誰でもよいものであって同時に万人であるもの〉<sup>59)</sup>となるにつれて、彼女あるいは女神もより無名性をおびたA \* \* \*になってゆくのである<sup>59)</sup>。そしてさらに「記憶すべきことども」*Mémorables* では、ただ \* \* \* で示される、名を持たぬ神となる<sup>60)</sup>。M = J デュリーが言うように、この〈名を持たぬ心像〉は〈己れのうちに人間的な、また神話的な心像の全体性を閉じ込め〉<sup>61)</sup>うるだろう。

この \* \* \* *trois astérisques* の神話、無名性によって人間総体を含む神話において、試煉は終わり、「もうひとつの客観的世界」の認識がなされ、夢と人生はその宇宙的調和を回復し、宇宙が再創造されるのだ。

〈詩人と聖職者とは、太初にはひとつであった。後代になってはじめて、両者は分離した。しかし、真の聖職者がつねに詩人であったように、真の詩人はつねに聖職者である。いつか昔の事態がふたたび回復することはないであろうか。〉<sup>62)</sup>

「記憶すべきことども」におけるネルヴァルには、このノヴァーリスの言葉がふさわしいだろう。この夢見られた生における「私」あるいはネルヴァルには、もはや特定の名前は不適当である。なぜなら彼はまさに特性のない男となり、人間総体と等しい人間であるのだから。そして「オーレリア」は、その特性をもたぬがゆえに、\* \* \* の神話であるがゆえに、あらゆる人間、あらゆる神話をも含んで、これほどの美しい物語として輝やいているのである。

#### 〔注〕

- 1) *AURÉLIA de Gérard de Nerval*, texte présenté et commenté par Pierre-Georges Castex, S. E. D. E. S., 1971, I, 1. p. 23.
- 2) *Ibid.*, I, 9. p. 48.
- 3) *Ibid.*, II, 6. p. 73.
- 4) *Ibid.*, II, 6. p. 84.
- 5) *Ibid.*, I, 1. p. 23.
- 6) *Ibid.*, II, 3. p. 60.
- 7) D. バカン、「フロイトとユダヤ神秘主義」参照。
- 8) *SYLVIE de Gérard de Nerval*, Texte présenté et commenté par Pierre-Georges Castex, S. E. D. E. S., 1970, II-Résolution, p. 34.
- 9) *Ibid.*, I.-Nuit Perdue, p. 27.

- 10) Ibid., II.-Adrienne, p. 32.
- 11) 例えば、火、血、黄金、向日葵、獅子などは太陽に属する、等々。異なるもの同士は反撥し、同種のは引きつけ合う。「こうして反感と共感の法則の下に万物が永遠に運動する巨大なマンダラ図として大宇宙が構成されるのである。」(種村季弘「パラケルスの世界」青土社、p. 128、1976年)
- 12)、13) *AURÉLIA*, II, 4, p. 64.
- 14) Gérard de Nerval; *Œuvres I*, Gallimard, bibliothèque de la pléiade, 5<sup>e</sup> édition, 1974. (以下 pl. と略) *Promenades et Souvenirs*, IV. Juvenilia, p. 135.
- 15) Aristide Marie; *Gérard de Nerval*, Hachette, 1955, p. 72.
- 16) <可哀そうなアドリエヌ! 彼女は聖S……の修道院で亡くなったのよ……1832年頃に。> *SYLVIE*, XIV.-Dernier Feuillet, p. 65.
- 17) Georges Bataille; *La Littérature et le mal*, collection idées, Gallimard, p. 13. (山本功訳)
- 18) Pl. I, *Sur un Carnet* p. 434.
- 19) *SYLVIE*, I.-Nuit Perdue, p. 29.
- 20) Pl. I, *La Grand'mère*, p. 19.
- 21) *AURÉLIA*, I, 7, p. 40.
- 22) *SYLVIE*, IX.-Ermenonville, p. 52.
- 23) ネルヴァルは「II-アドリエヌ」に見られるような古い歌唱法に強い愛着を感じている。それはコンセルヴァトワール流の歌唱法の流布によって次第に失われてゆく。「シルヴィ」(XI-婦り路)、「十月の夜」(IX 無礼講<sup>ゴッパ</sup>)、「散策と回想」(III 歌のつどい)等参照。
- 24) *SYLVIE*, III.-Résolution, p. 34.
- 25) ルイ・ユルバックの不正確な版でしか知られていなかった「阿呆大王」のマニュスクリにもとづく校訂版を出版したジャン・リシェにあてて、フランソワ・コンスタンは次のような手紙を書いている。<ネルヴァルの夢を表現している形象や象徴の大半が、彼の最初の狂気の発作以前に、彼のうちに存在していたということ、あなたは明らかにされたのです。> François Constans; *Gérard de Nerval devant le destin*, Nizet, 1979. p. 8、リシェの序文。リシェによる引用。
- 26) *Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval*, VI. *Le Prince des Sots*, II, 22, Le théâtre, p. 190. Minard, 1960.
- 27) ヴァレリーはブルトンにあてた1916年8月頃の手簡の中で、ある田舎の狂女について語り、その狂女の「わたしは《白》を食べる女じゃないわよ」という言葉の中にポエジーを見ている。ここにもおそらく真実の断片を語る者＝狂人がいる。Henri Pastoureau; *Des influences dans la poésie présurréaliste d'André Breton* の引用による。Langages; André Breton, p. 54, Baconnière, 1970. (湊健志氏の協力による。)
- 28) *AURÉLIA*, I, 1. p. 23.
- 29) Rimbaud; *Œuvres*, Garnier, 1960. p. 346. ポール・ドメニー宛書簡、1871年4月15日付。
- 30) ノヴァーリス「花粉」16、(前田敬作訳)「日記・花粉」現代思潮社、1974年。
- 31) ダンテ「神曲」地獄篇、第三歌、(野上素一訳)筑摩世界文学大系11、昭和48年。
- 32) エリアーズ「聖と俗」参照。<それは死と埋葬を表わし、生と復活を表わす。(……)われわれが頭をちょろど墓の中に沈めるように水の中に浸すとき、古き人は全く沈められ埋葬される。われわれが水から上ると同時に新しい人が現われる。>(風間敏夫訳)法政大学出版社、1969年。
- 34) *AURÉLIA*, I, 7, pp. 41-42. ミナール版「オーレリア」の注(p. 37)によれば、この箇所はマクロコスモスとミクロコスモスの統一が問題となっている。*Aurélia*, texte publié par Jean Richer, Minard, 1965.
- 35) Pl, II, p. 710.
- 36) *AURÉLIA*, Commentaire, p. 167.
- 37)、38) セリグマン「魔法」(平田寛訳)平凡社、p. 132、昭和49年。

- 39) 「ユング自伝Ⅱ」『死者との七つの語らい』p. 268、(河合隼雄他訳) みすず書房、1973年。
- 40) *Le Discours de la Méthode* にく検討しようとするもろもろの難問のひとつひとつを、できるだけ、またそれらをよりよく解決するために必要なだけ、多数の小部分に分割すること> (小場瀬卓三訳) とある。10/18 U. G. E. p. 46.
- 41) SYLVIE, XIII Aurélie, p. 61.
- 42) Ibid., 14, Dernier Feuillet, p. 63.
- 43) テオフィル・ゴーチェ「青春の回想——ロマンチズムの歴史——」(渡邊一夫譯) 富山房百科文庫2、昭和52年。
- 44) Raymond Jean; *Nerval par lui-même*, seuil, p. 30, 1971.
- 45) AURÉLIA, I, 4. p. 33.
- 46) Pl. I, p. 900. 3月7日付書簡。
- 47) J.-P. Richard; *Poésie et Profondeur*, p. 59. (有田忠郎訳) seuil, 1955.
- 48) 以下の文は高橋巖「神秘学序説」pp. 154—159 によるユングの「思惟の二つの種類について」の解説にもとづいている。(イザラ書房、1975年)
- 49) 同書、p. 158.
- 50) 同書、p. 159.
- 51) Pl. I, *Madame et Souveraine*, p. 44.
- 52) アブラクサスについては注39) にあげたユング『死者との七つの語らい』、ヘルマン・ヘッセ「デミアン」その他を参照のこと。
- 53) Pl. I. *Pandora*, p. 347.
- 54) Ibid., p. 356.
- 55) AURÉLIA, I, 6. pp. 39—40.
- 56) Pl. I. *Paradoxe et Vérité*, p. 437.
- 57) AURÉLIA, II, 5. p. 69.
- 58) 注47) 参照。
- 59) A \* \* \* は Aurélia (Aurélie) であるばかりでなく Adrienne, Artémis でもあるだろう。ミナール版 p. 71 参照。
- 60) AURÉLIA, II, 6. p. 80.
- 61) Marie-Jeanne Durry; *Gérard de Nerval et le Mythe*, p. 141, Flammarion, 1955.
- 62) ノヴァーリス、「花粉」71、前掲書、p. 136.

なお訳文は筑摩書房「ネルヴァル全集」全三巻、思潮社「阿呆の王」その他を参照させていただいた。